

■ 第3章 注釈 「『現代アメリカ』の形成における〈革新主義〉の位置づけ」

1 本論の序章で定義した通り、国内のアメリカ史学研究の蓄積にならない、「現代アメリカ」の語を「20世紀初めに形成された今日にも至る新しいアメリカ」という意味で使用している。本論の序論に論じた。

2 主に用いたテキストは以下である（有賀貞『アメリカ史概論』東京：東京大学出版会、1987年。有賀夏紀『アメリカの20世紀〔上・下〕』東京：中公新書、2002年。有賀夏紀、油井大三郎、編『アメリカの歴史：テーマで読む多文化社会の夢と現実』東京：有斐閣、2003年。遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』東京：放送大学教育振興会、2008年。有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎、編『アメリカ史研究入門』東京：山川出版社、2009年。亀井俊介『アメリカ文学史〔1・2・3〕』東京：南雲堂、1997年。野村達郎『ユダヤ移民のニューヨーク』東京：山川出版、1995年。古矢旬『アメリカニズム：「普遍国家」のナショナリズム』東京：東京大学出版会、2002年。野村達朗『アメリカ労働民衆の歴史：働く人々の物語』京都：ミネルヴァ書房、2013年。紀平英作『歴史としての「アメリカの世紀」：自由・権力・統合』東京：岩波書店、2010年。常松洋『大衆消費社会の登場』東京：山川出版、1997年。常松洋『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』京都：昭和堂、2006年。中野耕太郎『戦争のつぼ：第一次世界大戦とアメリカニズム』京都：人文書院、2013年。中野耕太郎『20世紀アメリカ国民秩序の形成』名古屋：名古屋大学出版会、2015年。）。

3 中野耕太郎「改革の時代とふたつの世界大戦：1898～1945年」、有賀夏紀ら編『アメリカ史研究入門』、89頁。

4 ベネディクト・アンダーソン『増補・想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石さや、白石隆訳、東京：NTT出版、1997年。

5 古矢旬『アメリカニズム』、v～vi頁。

6 有賀夏紀「“One Nation under God”：宗教と国民意識」、有賀夏紀ら編『アメリカの歴史』、254頁。

7 「アメリカ独立革命の指導者（ファウンディング・ファーザーズ）の思想は、理性への信頼、人間の尊厳、基本的人権を中心とする啓蒙主義であった。しかし、彼らはキリスト教に対して批判的であったわけではない。〔中略〕当時のニューイングランドの民衆の心を捉えていたもの、それは聖書でありキリスト教であった。革命の指導者たちも、これを十分に認識していた」（有賀「“One Nation under God”：宗教と国民意識」、256頁。）。

8 同前、有賀夏紀、258頁。

9 アレクシ・ド・トクヴィル『アメリカのデモクラシー』〔第二巻上〕、松本礼二訳、東京：岩波文庫（白9-4）、1840年=2008年、22～23頁。

10 同前、有賀夏紀、257頁。

- 11 古矢旬『アメリカニズム』、6頁（傍点は本論の筆者による）。
- 12 同前、古矢、4頁。
- 13 同前、古矢、v～vi頁、6～7頁。
- 14 トクヴィル『アメリカのデモクラシー』〔第一巻上・下、第二巻上・下〕、松本礼二訳、東京：岩波文庫（白9-4）、1840年=2008年。
- 15 古矢旬『アメリカニズム』、6頁。
- 16 岡山裕「再建と金メッキ時代：1865-98年」、有賀夏紀ら編『アメリカ史研究入門』、71頁。
- 17 小檜山ルイ「産業社会の到来」遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、141～142頁。
- 18 古矢旬『アメリカニズム』、18～19頁。
- 19 有賀夏紀『アメリカの20世紀 上』、18～19頁。「それは単なる比喩ではなかった。ニューヨークのある晩餐会で、夕食後、客に100ドル紙幣にくるんだタバコが配られた」（同前19頁）。
- 20 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク：移民の世界と労働の世界』東京：山川出版社、1995年、6頁（なかでも1880年代に建てられた5番街660番地のウィリアム・K・ヴァンダービルド邸は、まさにフランスのブロワ城のような石造りの城で知られた。）。また、彼らはときに「新興成り金」とも揶揄されて独立宣言以来の旧富裕層との確執があった。その折、社交場でもあったニューヨークのオペラ劇場（アカデミー・オブ・ミュージック座）のボックス席購入をめぐり旧派から妨害をうけ、それを恥辱としたヴァンダービルド家が反骨から80万ドルを募り、〈メトロポリタン歌劇場〉〔Old Met.〕を創設した（奥田恵二『「アメリカ音楽」の誕生：社会・文化の変容の中で』東京：河出書房新社、2005年、188頁。）。
- 21 中野耕太郎「改革の時代とふたつの世界大戦：1898～1945年」、有賀夏紀ら編『アメリカ史研究入門』、89頁。
- 22 小檜山ルイ「産業社会の到来」遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、147頁。なお、〈ボス政治〉についての解説はこの項の後でふれる。
- 23 田中勇『国際社会の性質：国際政治研究の視座から』東京：近代文藝社、1996年、86頁。
- 24 このような企業（トラスト）の弊害は、〈マクレーカー〉の端緒で知られるアイダ・M・ターベルによる『スタンダード石油会社の歴史』（1901年）に著され、元締めロックフェラーによる巨大石油トラストの形成過程での、独立系石油会社の自由競争を破壊する容赦ない圧力や乗っ取り、鉄道輸送やパイプラインの独占などが世の明るみにでて社会問題となった（小檜山ルイ「産業社会の到来」遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、148頁。）。ターベルの父は独立系石油会社の経営者であり、実際に問題の渦中にあった。
- 25 有賀貞『アメリカ史概論』、231頁（「アメリカの場合は、19世紀前半には北東部農業社会出身者の、すなわちアメリカ生まれの労働者、19世紀後半1890年代までは西欧農村からの移民労働者、19世紀末から20世紀初頭にかけては東・南欧農村出身者の移民労働者というふうに、時期毎に民族・宗教的背景を異にする集団が産業労働の担い手となったのであり、その間に系譜的連続性がないことが特徴なのである」）。

- 26 有賀夏紀『アメリカの20世紀 上』、27頁。
- 27 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』、14頁。
- 28 有賀貞『アメリカ史概論』、231頁。
- 29 有賀夏紀『アメリカの20世紀 上』、18頁。
- 30 小檜山ルイ「産業社会の到来」遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、143頁。〈新移民〉たちの過酷な縫製産業での労働形態は〈スウェットショップ〉〔搾取工場〕の語で知られる。テネメントハウスでの過酷な生活を含め、かかる〈新移民〉たちの当時の劣悪なる環境は以下に詳しい。野村達朗「第3章、スウェットショップとスラム」『ユダヤ移民のニューヨーク：移民の生活と労働の世界』東京：山川出版社、1995年、67～118頁。
- 31 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』、102～106頁〔貧困による治安や衛生の悪化について〕。有賀夏紀『アメリカの20世紀 上』、16～17頁（「夫婦、年とった祖母、六人の子供の九人家族が、居間と寝室と食堂を兼ねた三メートル四方の部屋と、入り口にあるそれより狭い台所からなるアパートに住んでいたのであるが、一ヶ月七ドル半という家賃は働き者の夫の一週間分の給料より高かった〔略〕。イギリスの小説家チャールズ・ディケンズも、ニューヨークのマンハッタン南部の地区を訪れたとき、『胸がむかつくような、気のめいるような、腐敗したもの全てがここにある』と述べた。）。なお現在ではニューヨーク市オーチャード通り97番地にある〈テネメント博物館〉(Tenement Museum)において、当時の建物内部が公開されている。
- 32 同前、有賀夏紀、17～18頁。
- 33 同前、有賀夏紀、4頁。
- 34 他方、本来政府が行うべき福祉的サービスを〈マシン〉が代行していたという側面も考慮すべきである〔野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』、209頁。〕。ニューヨーク市では〈タマニーホール〉という〈マシン〉が、移民が多く住むロウワー・イースト・サイド地区で支配的な勢力を確立していた。
- 35 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』、207～209頁
- 36 有賀貞『アメリカ史概論』、248頁。
- 37 中野耕太郎『戦争のるつぼ：第一次世界大戦とアメリカニズム』京都：人文書院、2013年、21頁。
- 38 同前、中野耕太郎。
- 39 富田虎男、鶴月裕典、佐藤円編著『アメリカの歴史を知るための62章、第2版』東京：明石書店、2009年、174頁。
- 40 市野川容孝、宇城輝人編『社会的なるものために』京都：ナカニシヤ出版、2013年、41頁。

- 41 オリヴェエ・ザンズ『アメリカの世紀：それはいかにして創られたか？』有賀貞、西崎文子共訳、東京：刀水書房、1998年=2005年、9頁。
- 42 同前、ザンズ（「日本のアメリカ史の専門家の間では当時のプロGRESSIBは慣例的に『革新派』『革新主義者』と訳される。」）。
- 43 有賀貞『アメリカ史概説』、250頁。
- 44 田中勇『国際社会の性質』、86頁。中谷義和「アメリカ革新主義期の国家像の模索：H・クローリー『アメリカ的生活の約束』の場合」、中央大学『中央大学論集』第7号、1986年3月、63頁。岡本仁宏「アメリカ革新主義研究の展開と共和主義」、関西学院大学『法と政治』第40巻1号、1989年、84～85頁。
- 45 田中勇『国際社会の性質』、86頁。
- 46 中野耕太郎『戦争のるつぼ』、21～24頁。小檜山ルイ「産業社会の到来」、遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、146～151頁。
- 47 [ハーバード・クローリーの『アメリカ生活の約束』(1909)は]「T・ローズヴェルトをして『ここ長年のあいだにあらわれた、わが国民状況の最も豊かで示唆的研究』と叫ばしめ (Arthur A. Ekirch, Jr., *The Decline of American Liberalism*, p 190)、彼の『ニュー・ナショナリズム』の理念的骨格のひとつとなった」(中谷義和「アメリカ革新主義期の国家像の模索」、60頁。)
- 48 田中勇『国際社会の性質』、89頁。
- 49 同前、田中勇、90頁。
- 50 中谷義和「アメリカ革新主義期の国家像の模索」、中央大学『中央大学論集』、67～68頁。
- 51 同前、中谷義和、68頁。
- 52 富田虎男「アメリカの二つの未来像：リパブリカンとフェデラリスト」、富田虎男ら編著『アメリカの歴史を知るための63章 第3版』東京：明石書店、2015年、80～83頁。
- 53 本間長世「現代アメリカの政治と文化」、本間長世、亀井俊介、新川健三郎編『現代アメリカ像の再構築：政治と文化の現代史』東京：東京大学出版会、1990年、2頁。
- 54 田中勇『国際社会の性質』、93頁。
- 55 中谷義和「アメリカ革新主義期の国家像の模索」、69頁。
- 56 同前、中谷義和、69～70頁。田中勇『国際社会の性質』、94頁。
- 57 同前、中谷義和。同前、田中勇。
- 58 同前、田中勇、94～95頁。

- 59 中野耕太郎『20世紀アメリカ国民秩序の形成』名古屋：名古屋大学出版会、2015年、44頁。
- 60 同前、中野耕太郎
- 61 オリヴェエ・ザンズ『アメリカの世紀：それはいかにして創られたか？』有賀貞、西崎文子共訳、東京：刀水書房、1998年=2005年、44頁。
- 62 中野耕太郎『20世紀アメリカ国民秩序の形成』、46頁。
- 63 飯山雅史『アメリカの宗教右派』東京：中公新書ラクレ、2008年、32～33頁。飯山によれば、アメリカ国内のプロテスタント諸派における聖書解釈の立場を整理するならば、最も保守的な〈イギリス国教会〉〔アメリカ聖公会〕から順に、以下ピューリタンとして、〈長老派〉、〈会衆派〉、〈バプチスト派〉、〈クエーカー教徒〉のように急進化する。
- 64 同前、中野耕太郎、44、46頁。
- 65 常松洋『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』京都：昭和堂、2006年、86～87頁。
- 66 小檜山ルイ「産業社会の到来」遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、149頁。
- 67 三城大介「ジェーン・アダムスとハルハウスを訪ねて」、『地域社会研究』、別府大学地域社会研究センター、第17号、2009年、29頁。三城によると、ジェーンの名付け親はリンカーン大統領であり、シカゴの生家は、銀行、鉄道、材木商、製粉業を営む大富豪であったという。なお、ジェーンは脊椎に持病があり、当時のアメリカの教育を受けた女性に期待された「よき母」となることが適にくいという背景があった。裕福である一方、母とは幼いころ死別し、兄弟は精神疾患をもつなど家庭環境は複雑であった。
- 68 同前、常松洋、90頁。
- 69 同前、常松洋、93頁。
- 70 同前、常松洋、93～95頁。
- 71 一方、その事業において黒人やネイティブ・アメリカンもまた積極的な対象としたことを示す資料は管見に知らない。
- 72 小檜山ルイ「産業社会の到来」、遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、149頁。
- 73 杉山恵子「エレン・ゲイツ・スター：ハル・ハウスにおける製本制作の盛衰を中心に」、『恵泉女学園大学紀要』第26号、2014年、95～97頁。
- 74 中野耕太郎『20世紀アメリカ国民秩序の形成』、47頁。
- 75 同前、常松洋、101頁。

- 76 同前、常松洋、108～111 頁。
- 77 中野耕太郎「改革の時代とふたつの世界大戦」、有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎編『アメリカ史研究入門』東京：山川出版社、2009 年、90 頁。
- 78 有賀貞『アメリカ史概論』79 頁。
- 79 同前、有賀貞、77 頁。
- 80 紀平英作「アメリカ史はどのように描かれてきたか」、有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎編『アメリカ史研究入門』東京：山川出版社、2009 年、21 頁。
- 81 有賀貞『アメリカ史概論』77～78 頁。
- 82 ハーツの説に伴う「恵まれた過去」の語の使用は以下から引用。有賀貞『アメリカ史概論』77～78 頁。
- 83 紀平英作「アメリカ史はどのように描かれてきたか」23 頁。
- 84 野村達朗「アメリカにおける『新労働史』の誕生の背景：『ニューレフト史学』とその受容を中心に」、『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』第 19 巻、2004 年、37 頁。
- 85 「コーポレート・リベラリズム」に関する邦文資料は—— もとより〈ニュー・レフト史学〉自体を含めて—— 多くない。基本資料としては、以下に挙げた高橋論文があり、その他、野村や有賀の論文は理解に有益である。高橋章「アメリカ『ニュー・レフト史学』」、『歴史評論』1978 年 9 月号、校倉書房、34 頁。野村達朗「アメリカにおける『新労働史』の誕生の背景」、38 頁。有賀夏紀「『新しい社会史』の功罪-アメリカ歴史学のゆくえ」、『現代アメリカ像の再構築』、198 頁。牧野裕「アメリカ資本主義論の輪郭」『一橋研究』6 巻 3 号、1981 年、88～94 頁。
- 86 高橋章「アメリカ『ニュー・レフト史学』」、38 頁。野村達朗「アメリカにおける『新労働史』の誕生の背景」、38 頁。
- 87 野村達朗「アメリカにおける『新労働史』の誕生の背景」、38 頁。
- 88 ウィリアム・A・ウィリアムズ『アメリカ外交の悲劇』高橋章、松田武、有賀貞訳、東京：御茶の水書房、1986 年、43 頁。
- 89 フレデリック・ルドルフ『アメリカ大学史』阿部美哉、阿部温子訳、町田：玉川大学出版部、1962 年=2003 年、237 頁。江原武一「アメリカの学部教育の現状」、『立命館高等教育研究』6 巻、2006 年、61 頁（「大学のドイツ・モデルにならって、ジョンズ・ホプキンス大学が 1876 年に創設」）。
- 90 ザンズ『アメリカの世紀』22～23 頁。ザンズはハーバード大学学長チャールズ・エリオットが 1869 年にのべた以下のアメリカの大学の指針を示す言葉を引用している。「大学は、ことばのどのような意味においても、種から成長しなければならない。それはイギリスあるいはドイツから枝葉がそろい実がついた植物として移植されるものではない。〔中略〕アメリカに大学が出現するとき、それは外国の大学の模倣ではなく、温

室で育てられた植物でもなく、アメリカの社会的政治的習慣からゆっくりと自然に育ってきたものであり、よりよい教育を受けた階級の平均的目的と野心とを表現するものとなろう」。上山隆大『アカデミック・キャピタリズムを超えて：アメリカの大学と科学研究の現在』東京：NTT出版、2010年、135頁。「研究大学というドイツから移植された大学の理想像も、この分権的な大学環境の中ですぐにアメリカナイズされていった」。

91 ザンズ『アメリカの世紀』23頁。

92 ザンズ『アメリカの世紀』、24頁。

93 ザンズ『アメリカの世紀』25頁。

94 1887年の「ハッチ法」‘Hatch Act’とは、すでに1862年に設立されていた各州の〈ランド・グラント大学〉〔連邦政府が国有地を各州に提供し、近代的農業や工業による地域産業振興のために新設した「土地付与大学」。その多くは今日の州立大学の原型となった〕において、さらに附属の農業試験場（Agricultural Experimental Station）の設置を定める法。

95 同前、ザンズ。

96 同前、ザンズ、27頁。「私立及び公立の研究指向大学と会社が設立した研究所に加えて、連邦政府も農業試験場に財政援助を行い、それを研究促進体制の新たな第三の構成者にした（後に軍部が第四の構成者になる）」。

97 同前、ザンズ、28～29頁。「デボラ・フィッツジェラルドによるコーンの異種交配の研究は、形成されつつあった研究促進体制に特徴的な、人と関心との結合を代表し、新しい研究施設がグレンジャーたち〔政治的圧力団体として活動した農民の団体のメンバー〕の懸念にもかかわらず農民の要望に耳を貸そうと努めた方法を具現している。彼女は『しばしば科学教育の恩恵なしに、選別と多様な交配とにより生産量を増大させようとしていた実際的品種改良家』あるいは農業の職人の関心と、『通常農学部に所属し』、コーンを『遺伝の一般法則を研究するための実験的手段として』用いていた植物学者あるいは生物学者の関心とを連結してみた」。

98 同前、ザンズ、27、32～33頁。

99 同前、ザンズ、33頁。

100 同前、ザンズ、17頁。

101 同前、ザンズ、17～18頁。

102 同前、ザンズ、18頁。

103 同前、ザンズ、18～19頁。

104 同前、ザンズ、19頁。

105 同前、ザンズ、19～20頁。

- 106 上野継義「アメリカ人事管理運動と『人間工学』の諸相(1)：人間工学ブームの盛衰」、『商學論集』第83巻4号、福島大学経済学会、2015年、93～94頁。アメリカの20世紀初頭に現れた労務人事管理としての「人間工学」‘Human Engineering’は、その後、「ユーザー・インターフェース」や「ユニバーサル・デザイン」などの探究を主に含意する今日での「人間工学」‘Human Factors’の淵源の一つとなるものである。
- 107 同前、上野、97頁。
- 108 ザンズ『アメリカの世紀』、9頁。ここでの引用内での□の部分、本論文の筆者による付記ではなくて、ザンズ自身による付記をそのまま引用したものである。
- 109 同前、ザンズ、7頁。
- 110 同前、ザンズ、55頁。
- 111 同前、ザンズ、77頁。
- 112 同前、ザンズ、85頁。
- 113 同前、ザンズ、81頁。
- 114 同前、ザンズ、106頁。
- 115 同前、ザンズ、101頁。常松洋『大衆消費社会の登場』東京：山川出版社、1997年、33頁。
- 116 同前、ザンズ、104頁。
- 117 同前、ザンズ、105頁。
- 118 同前、ザンズ、109頁。
- 119 同前、ザンズ、127頁。
- 120 常松洋『大衆消費社会の登場』、33頁。
- 121 有賀貞「アメリカ『革新主義』論」、『社会科学ジャーナル』第6巻、国際基督教大学社会科学研究所、1965年、192～193頁。この論文を参照しつつ、社会的側面において、革新主義期に行なわれた主だった改革をまとめるならば、以下があげられる。●【政治改革】合衆国上院議員の直接選挙 / 州や地方自治体におけるボス政治などに対する政治腐敗防止法 / 直接民主制の導入 ●【経済的改革】連邦及び州において施行された反トラスト法や企業活動の規制 / 鉄道及び公益企業の統制 / 所得税の徴収 / 大企業への累進課税 ●【社会福祉改革】公衆衛生の取締りと改善 / 労働者の災害保障 / 労働条件規制に関する立法 / 老人年金等の社会保障立法。
- 122 ザンズ『アメリカの世紀』、7頁。
- 123 同前、ザンズ、5頁

124 同前、ザンズ、9頁。

125 “via”, 下宮忠雄、金子貞雄、家村睦夫編『スタンダード英語語源辞典』東京：大修館書店、1989年、576頁。

126 中野耕太郎『20世紀アメリカ国民秩序の形成』、45頁。

127 ポール・クルーグマン『格差はつくられた：保守派がアメリカを支配し続けるための呆れた戦略』三上義一訳、東京：早川書房、2007年=2008年、25頁。トマ・ピケティ『21世紀の資本』山形浩生、守岡桜、森本正史訳、東京：みすず書房、2013年=2014年（「1910年から1950年にかけてほとんどの先進国で生じた格差の低減は、何よりも戦争の結果であり、戦争のショックに対応するため政府が採用した政策の結果なのだ」22～23頁。「果てしない格差スパイラルを避け、蓄積の動学に対するコントロールを再確立するための理想的な手法は、資本に対する世界的な累進課税だ〔市場のなすがままに任せるのではなく政策が必要である。補足は本論の筆者〕」489頁。）。

128 ザンズ『アメリカの世紀』、7頁。

129 ザンズ、同前。

130 常松洋『大衆消費社会の登場』、33頁。

■ 第4章 注釈 「スティーグリッツ・サークル」

¹ Van Wyck Brooks, *America's Coming-of-Age*, (New York: B.W.Huebsch, 1915), p.9; ヴァン・ワイク・ブルックス「アメリカ成年期に達す」、『社会的批評・アメリカ古典文庫 20』国重純二・井上謙治訳、東京：研究社、1915年=1975年、113頁。

² 井上謙治「社会批評の伝統」、『社会的批評・アメリカ古典文庫 20』国重純二・井上謙治訳、東京：研究社、1915年=1975年、19頁。

³ 1921年6月、コーブランドは、同年にパリに新設された、パリ郊外の「フォンテーヌブロー・アメリカ音楽院」“Conservatoire américain de Fontainebleau”のサマースクールに参加するために渡仏した（HPAC, p.45）。この学校は、もともと、アメリカ軍のバーシング將軍が隊内楽団の音楽の水準を高めることを企図し、アメリカの名指揮者ウォルター・ダムロッシュに協力を要請し、この指揮者が主導してヨーロッパ